



春色英
對暖語

五

編

上

徳
遠
840
13



遠へ門
號 870
卷 18

明治三六年
十月十八日
印

英對暖語五編序

惠乃花の暖語ゆづりよりゆづり其香をかほ言いふ
梅うめのうめの四編しへん揃そろ辰巳たつみの園その中なか
色いろぞ濃こ。三十冊さんじゅうの新案しんあんハ能よくも穿うがはら
狂きやう初はつ亭てい實げ不ふ先生せんせいのの志しをを奈何いかんぞ
是こゝ迄まで作つくらんとと讀よむ者ものおと人ひとのの評判ひやうはん有あり

英對暖語五編序

一眼前（まへ）又（また）や（や）不（ふ）稿（こう）を（を）あ（あ）け（け）ん。
 英對暖語（えいたいぬゑご）と題（だい）せ（せ）る（る）同（どう）く（く）續（つづ）の（の）十五冊。
 全本（ぜんぽん）四十五卷（しごじゅうご）とある。是（こゝ）で（で）人情（にんじやう）一家言（いっかごん）。
 三都（さんと）ハ（ハ）勿論（もちろん）海内（かい内）ハ（ハ）吟（ぎん）を（を）継（つぎ）穂（ほ）の（の）梅（うめ）の
 外題（がいだい）ハ（ハ）流行（りやうぎやう）の（の）書質（しよしち）の（の）為（ため）永（なが）と（と）旨味（うまみ）を
 特（とく）より（より）知（し）る（る）もの（の）ハ（ハ）花（はな）の（の）海（かい）江（え）ハ（ハ）不（ふ）虚（こ）名（な）を

う（う）。外（がい）小類（せうるい）を（を）き（き）。田（でん）分（ぶん）の（の）氷上（ひやうじやう）。文（ぶん）
 亡（むしやう）目（め）の（の）棟梁（とうりやう）た（た）る（る）。

浅草堀多原（あさくさほりたはら）の（の）醉客（すいかく）

平亭主人銀鷄


米八阿娜吉丹次郎の物語類本目録 文永堂販

梅のよきと 恵 純 花 漢齋英泉画 前後六冊

春色梅あよみ 柳川重信画 四編揃十二冊

梅のよきと 編 辰巳の園 歌川國直画 四編揃十二冊

梅のよきと 拾遺別傳 英對暖語 歌川國直画 五編揃十五冊

梅のよきと 梅美の婦称 英泉画 五編揃十五冊

梅園餘情西縁の色香 靜齋英一画 前後六冊

この本の題名 米八阿娜吉丹次郎の物語類本目録 全六十六巻 鳥永春水



甚しき事
かきしるる
くまの

米八阿
續





夫の命もはなれ
 縁々宗次郎の涙
 婦人の涙も涙
 様よかたきや
 後客肌北里の
 水さうらひ
 壺に
 尾外ナゴヤ



契情の賢さ
 遠柳川が
 善人
 信
 深
 川
 流
 義
 書



春色英對暖語卷之十三

梅の拾遺別傳

江戸 爲永春水著

笠の廿五回

げんろうしやくしよん げんろうしやくしよん げんろうしやくしよん
 元亨釋書小光明子沙門を總暮七浴室小窺ひ一喜頰
 記しり俗書中千人の垢を清め功德よもて阿闍佛と眼
 前小拜とさあひ一と媚てあるは佛法のものより多き俗説でも信
 むる者お柳河のりて佛戒を破る悪人と誇るるらんその
 野暮ある扇屋を捨て旅人情よ通じお柳を當世稀ある

其の美人と賞はべりてさきづかひ次第の難波ありてをりて
おし思ひて尋ね来りて所なるは多る情の迷ひありてをりて
利欲ふよらぶる使客の業はまづも使客の簡の評決するありて
多る是脱ふ其目も入てて殊にちうく雲降かき寒く肌を切ら
如く柳の雪が降つて来りて云く左様ヨウとありていんご
さぞ寒くうらみのろ火でも澤山おとて温を極 柳の松がたじ
まはヨ 家一 そはちやア此邊の中へ炭を入て是なるは炭がはまづ
りぐ 柳の炭屋へ左様りつて来ませらるるよ 家一 エイヤ今生る

登尺わごのありヨ 其の中へ炭屋が来るごらんとりてをりて
柳の夜炭屋が来りて久 家一 ヲホニ目か暮きて
けり余り放して夜昼が分別らるるなるごらるる 柳の
何ふおらうりて成て云 家一 けりらるるは愛致よ放してサ
柳のサ空をらうり何故電報があらまはらぬのら今日素
まはりのゆも頭上か親よ多つて多りまゝいんごはれども登の
生るまを来はれぬ居るまをせはり 家一 ナを柳の多せとお言ご
けまども病氣をお夜するところのまはらぬまはらぬとまらるる

時安堵て居るをせんう思ひ切つて文出して来る
けさどもさうで見るともなでたる主ごらふと出くまのまは
和うその消玉のふ武の斬うまを惜み冠をふして
笑ひあぐら 柳一とまぢやや田樂を焼女木偶の孫でござるの
まはねト四隅を見廻し 柳一鏡ハ何行ふあまのまは五
鏡があるのろ女が居ね人家ごのろ 柳一まそれでも 柳一
子焼もまひヨそして鏡を見ねでも松子相うらぶたの素
顔の美森のふかしも中分ハるひナ 柳一まこ直ふをね
まはねト四隅を見廻し 柳一鏡ハ何行ふあまのまは五

氣体めたうりお言あさるうら 柳一まごらまは六
体あるもの 寶正ごチ左様して居るとはまご次女をまご振ふ
思ひまねとまご家かー中の廣の帯絨をうまのしり 柳一
帯も夜類も伯母さんの方へきつてまごのハまご余羽あり
まはね今でも取入辰松の出来まはヨトのハ時一も隣家の
老女が戸を明て 柳一妻一おややま 柳一妻一おややま
のら子 家一お姑さん毎度有ごうハ率とまごやア序に向の
藤太へ酒と肴絨三人茶をどあうう入てお果あまごして佐倉

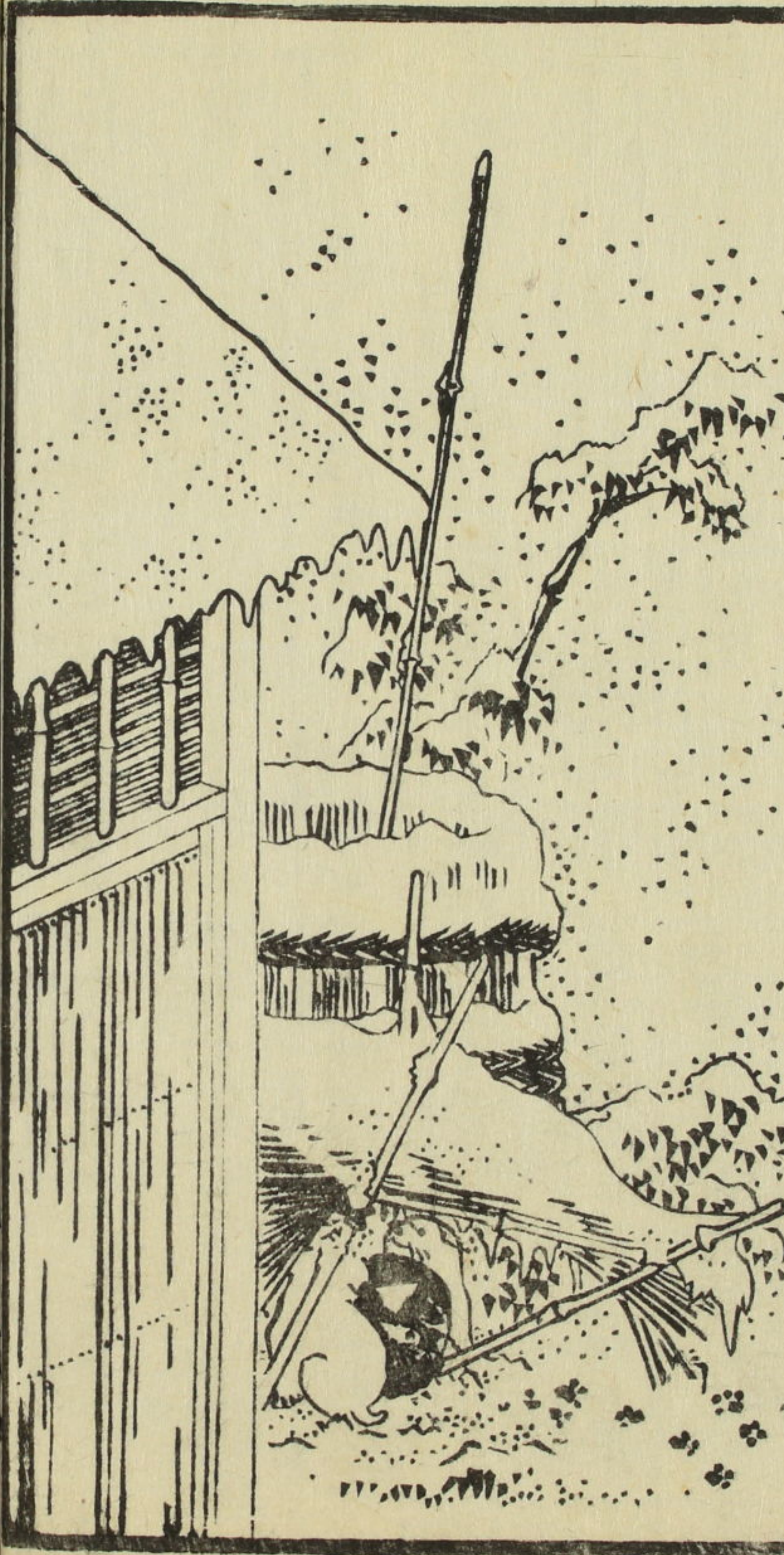
とて儀持て来ひと薪屋の家へ左振りつて是る世へそれらと
いひあつらふとて人出で銭紙二百文を強して却女小渡り
ま六雪が降のふ頼りやうに貸紙を言 妻「さういふ振りてこん
るふ多ふかハ 家「サ此間申うら賃紙が大分借ふまでならナ
又よるけいどもまづと世と取て是とお是る世へト書置ふ小巻を
取らせるも元来の且那風が失せざる由を今今賃紙の身をも
て他人を頼りて買頼りのせまゝ又ま使貸るををまらばハ約
届く人の癖とて金を満て番紙と七膳終する有財無鬼也
受けとるまきまき 妻「ハ少く左振りうらまお頼りやうにせうとのごま
まらぬせぬ 柳「ま松が今夜居ぬしとも在所で何ともまはは
まのうら子 家「まそのまや 言のサアノ奥の獨身者の宅へハ大それた
美安が来て居るまゝいまをと評判成するは遠のちのうら成
おけ此人の目ふかららぬ振うと是る 柳「まんが極人お是る
おがけ振の姿で居るうらうら否うてま振るまをうら おまのまら
だにヨ今ふ直に髪のかきかき 柳「まんが極人お是る
思へお是る成ナ 家「ナサ 左振思の成る實ハお是るがうらく

とて儀持て来ひと薪屋の家へ左振りつて是る世へそれらと
いひあつらふとて人出で銭紙二百文を強して却女小渡り
ま六雪が降のふ頼りやうに賃紙を言 妻「さういふ振りてこん
るふ多ふかハ 家「サ此間申うら賃紙が大分借ふまでならナ
又よるけいどもまづと世と取て是とお是る世へト書置ふ小巻を
取らせるも元来の且那風が失せざる由を今今賃紙の身をも
て他人を頼りて買頼りのせまゝ又ま使貸るををまらばハ約
届く人の癖とて金を満て番紙と七膳終する有財無鬼也
受けとるまきまき 妻「ハ少く左振りうらまお頼りやうにせうとのごま
まらぬせぬ 柳「ま松が今夜居ぬしとも在所で何ともまはは
まのうら子 家「まそのまや 言のサアノ奥の獨身者の宅へハ大それた
美安が来て居るまゝいまをと評判成するは遠のちのうら成
おけ此人の目ふかららぬ振うと是る 柳「まんが極人お是る
おがけ振の姿で居るうらうら否うてま振るまをうら おまのまら
だにヨ今ふ直に髪のかきかき 柳「まんが極人お是る
思へお是る成ナ 家「ナサ 左振思の成る實ハお是るがうらく



佛
戒
の
破
れ
を
お
柳
戒
に
負
け
た

差圖のめて久しうある酒のやふ樂しき左の思ひ出
 の困りふたりの變て入國をたぬ



持「家さん同をお覺したるひさしく大雲ふるりす」云
 松ややむ用ふまゝさう路次を歩ゆ不豆の甲も七雲が降ま
 ます「家」ヤ「左様うたまは困るこらふまは降らん」柳「お
 づらふの隻ちやあゝあせん綿帽子の振まのりさうくと
 降てあやうヨ「ド」をまぢやア記て見極うてあう「振側
 雨」を朋て後我見るといふのであひうはかろあひウ「そ
 まはの程でも宜あさるまはが真暗みのあは困るまはね入
 家「左様」たまは「今」は雲を朋らと朋光が少くはさるヨ

柳下 湯家の方に窓がひらきまはりの久松の夜ハ
はしも親が付きしるんぞ 家「ナ」長屋並ごとけ所不窓
所でひらひらけ家ハ一番突でちりまはが福荷さあころろ
横に窓が明てあつのがナとまごども雨の雲が降るまも
あご節の家内が他家よりあつるひらりるまごごけが徳
用サノアツミちりまはひこけぢやあひり 柳「ナ」又今ふ何根
でもあつるまはひ子孫お茶様の運ぶひらりくのが迷ひれたまは
柳「そのまはひ」ふんごごけまはひもお金をさしりまはひ

トテ火をさしりまはひ子孫「ト」身が打付てまふトこま
り二人してお殿の支度るを頼んで火鉢の傍へ向合て安座
お柳「清女艶素」まごどもお殿をりして首領包むと本意
るまはひのまはひ 柳「お茶様」清命おあつるまはひとて家内の
間おさそお困りな成まはひころまはひ 家「まはひ」分負をまはひるのもれ
樂でまはひらんとお茶「ト」かろて見ころお殿のまはひ大階を登
つ「お」の遠也まはひらんと男のお殿が一度でも味くお茶「ト」
ろ「お茶」ころいへお茶を煮るまはひもまはひ 家「まはひ」お茶不造出しとまは

畏を早く出離し甲斐も無く珠玉の場所もあつた
の家へ再度の勤めを永くする様ごと何程もあんど
らまるとまでいふ久永の月日お前の身に同返でも
出来し時分草葉の蔭の両親へは伯母のけて居るのみ
言ふけかまのひとりの義理一遍實はけ身が産む娘
と思ひてお便りふして居る程が何程もお細くして居る
ヨトのりく様も露帯さも出づけあるま女見まお柳も
あまらぬわーおきよららー偶もごあまらぬくあまらぬて居

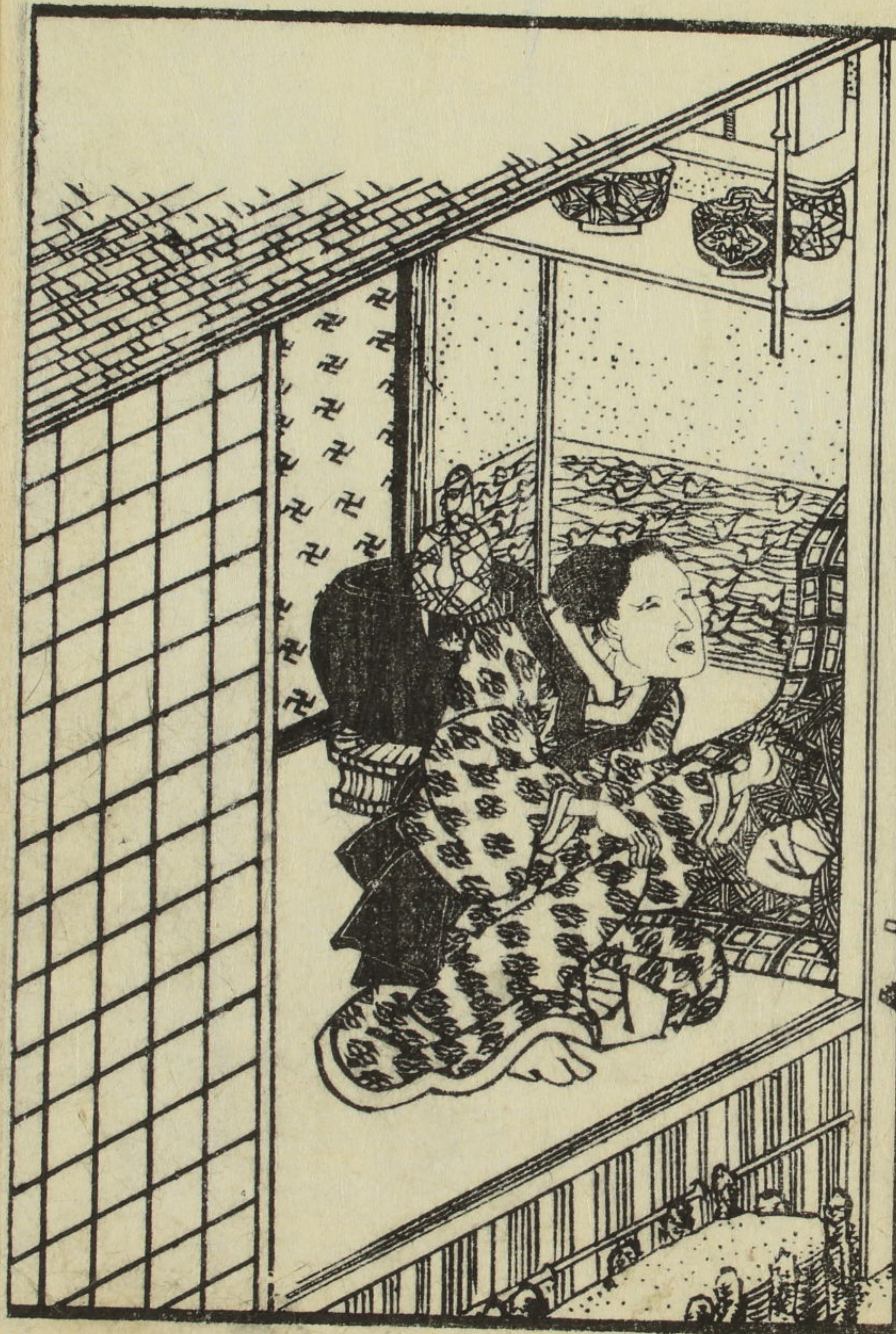
なまらぬか 伯母さんお茶の心の申でる程が是生でのり
お茶の心又け及のうろ病まぞ浮きまびごと笑つて居る
まてらあまらぬらぬ 伯母ニ左様いふのみが年もゆき
お茶が余牛苦勞をすらすらす病氣でも出るひけまびごと
思ひて居るのうろ病まらぬ一旦男の心で安せも替り身で
まてらあまらぬらぬのうろ病まらぬ人射して居る
らぬー女達もや知人小園人でもあつて居る
あまらぬを案じもすらすらす日ごと園をさんお茶

ナニヨクく 関ハのしー ませんヨトせどが子 松ヶ今年セの
は方セ余り心ノ空々るひ 女ごとお希し思ハまるが知
あいうらその 理言セ言事ハが子アノウ素人で家内ハ居
第の心持と侮アから河でも 女希ホあつて第の事ハ
是程ともイテ改めあひけま抱へて主人も自分の
よもま難ひうら 冷方あまゝ 行状も煙修りも大
あひけまバ又去地で 勉めうらう 不自由をすする度ガ
出来らうら 望みの約束をいへるも 勤めあめ不実サ

兼程で 竟他の人へ寒らうら ぬるひけまバ身分ガ立
あひうら 彼も 咄をさする程な 度があつてうら 悔ま
も休ぬしこが子 正直ふりバ 文さんなんども 家内ハ居
た時かと遠くで 松の身の上 我思ひやうもさく きて
も考理ぬ 度又 言セ 移る 困らせうら 泣せうら する程な
度あうら せかしも 早く 身修るし してさする 不実もぬ
けまバ 自分ガ 出積で 可なりぬ 家でも あらうら 親ハ
あつて 異言バ 私も 苦勞とさる 張合があつて けまども 友

達と諸方を並び歩んで活業もせだふ田舎入りて
あるて久しひる音信もせだふ細くもまり弟女の如
合がころひふけて今の家さんが室初信切よしてお
異の我文さんへ我理残きて振付け切て居さけき
ども又あやまうてあまをよこさるる直ふ来ておらま
らぶちのあまをせだふざぶよを晩うらうと私の身の
りうらうらぶツル星のまひ極よ腹を付けてまよ年季も
振て十分世話をしとお異の所人アノ文さんが田舎うら

帰つて来て家さんのうらうらて私を並ておくまの家人
文さんがあまをよこしてまよ世家さんお見らまて一弟の
私に面自あまうらぶゆ振まむらぶらう今思ひ出しても
物身へ肝がゆる後であります 伯一あつらど左振らう今
ノサを時よ家さんの産成方とりよめものハカ体あひるご
うらうらままらうら文さんの方ハ切よしてと松があま
異見せしつを園あひで 一ナまその特松が風並のり
家さんの方へ材振る氣ごと又家さんがとまらわぶら松を



お柳再夜
ちよとま
港の花と
伯母のつるきを
伯母のかさ

羨望うらみがうもあまのうら思おぼの切きりて別わかれて文ぶんさんの方かたへ
ゆきでありまた六 伯はく一いちき根ねきくばき時とき直ただに居ゐる
どとは家いえさんの方かたへ来きまがようこのふしウ 式しきや柄がら柄がら
あて左ひだり根ねあるものう子こま根ねなあづらのあひ氣き性の家いえ
さんぢやアあひヨ私わたしもまこま根ねきくばき氣きの空あまうまひりせ
あこのでいあひり実じつのあひ度たをいふ根ねぢや一旦いつたん姿すがたをうこ
のハ文ぶんさんの遠とほ善ぜんとやう根ねきくばきあむりでもあひヨあの通とほ
まをいひあまお美みの家いえさんへ射やて私わたしがまどくしくして六

外ぐわい聞もんがうら一いち免めんてもまう思おもの根ねよあうらあひうら坊ぼくさんよ
まのうらんでありま根ねきくばきまどくうら次つぎ女にょハ度たでも家いえさんの
思おもの根ねも考かんがへまどく考かんがへうらまどく編あひららうてあひうら
らうてあまはられあひで居ゐる家いえ申まを思おものも付つあひ家いえさんの
考かんが命いのちを考かんがへてゆき一いち申まをあゆら一いち念ねんが居ゐる時とき第だいが来きこ
のうら思おもの付つては家いえへ欠か込こで来きさんうらうらま理りぢやア
あひと思おもうてお美みな 伯はく一いちハ一いち也やをてまどくあま根ねきくばき
何なにでもう坊ぼくさんよあひうら世よを捨すてお美みな選せん俗ぞくを

させうのしんう身成あがめて見送度とまで悦ばせう
うう余程よろう如きのあひ家さんごノウ
伯母さんが情うしひまをうりお言ひヨ
さんめらうしんうで情うしんう再夜奉らまする親
あつしとりぬねまきてるあひヨあうく
さそ七能とりぬむらひ女しもあひヨ何でも左様
あてうう家さんふ積をせせて是非えの通りの身上
の入りてよあひけまが悔しううてあうあひヨ伯ナニ

そまじしつても家さんの内家の流しつての親内さんと
兄内さんの方で大急ふ南ひの内損がわけてま奉流し
合てころくううこのごとくしんうでうう
あひううしんうしんう左様ぶ子今頃中のあうく
角も當時初しと私の家さんと同居ふ苦勞せするの
思ふううしんうのあひらて連引ふ再度發せま
たので両方が情うしんうのあひのしんう親なまてま
でもあうく私のか八家さんの零落てかまのま何れを見

ついで先達申一糸修せしと身の言解罷せしもの成入
を及むがう私の持て居るものせと家さんふ入てうして
居るのふ世帯の人六種くのま残りうて家さんを幾の
ごらふあうう私のま残り机ごの狸ごのこころくうして洗湯
へゆても他人が私よ資後指をうて時をまらううら
何卒その人達の身を見返戻振ふあふし思ひ込で
お前ふとる辰のぶら子けら申うう家さんよまを
咄しおて見ごが子 伯一左振するが宜とお言ひのう

「いよ何様しく〜家さんのおまひのあふ子立世帯で
何と言ふこころをうて親よりけるまがひるものうのうら
他様おごり貧乏しく居てもけ表や表の者よ世帯よ
うらふらまひ〜身上を以率て喰や喰辰の申へま方の
振ふ美女が欠込で来るのふ本終ご悔しくは修せしと
も見せるがうと左振言うてお果ごが子 伯一おまひの
け寝はけ身のあふま振ふ自惚とう悦物とうをうて
うらふとまぢぢぢ思ひ申うるノウ隣家で悪くものうら

